大(応)神塚古墳(寒川町№8遺跡)保存目的のための調査概要

遺跡の名称 大 (応) 神塚 (寒川町 No. 8 遺跡)

調査実施日 平成 30 年 3 月 6 日 (火) ~3 月 30 日 (火) (内 14 日間)

所 在 地 高座郡寒川町岡田 2385

調 査 機 関 寒川町教育委員会 教育総務課

調 査 担 当 小林秀満

調 査 面 積 約 45.2 ㎡

調 査 原 因 保存目的

発見遺構 古墳時代:古墳の墳丘土、古墳裾(周溝?)

古代:土坑(経塚か)

中近世:溝状遺構、配石遺構

近代:明治期の調査痕

出土遺物 縄文土器、弥生土器片、土師器、陶磁器、近世鏡

調査成果

大(応)神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年(1908)、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。 これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの造築であろうとされている。

しかし、明治期の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、構築の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

今回、古墳の形態や、範囲、構築年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とするための調査を実施した。年度ごとにトレンチを設定し、概ね 3 年で調査、後 2 年で整理、報告書刊行予定である。

平成 29 年度は、裾部分、主体部、明治期の調査部分の把握、墳丘の形状把握のため、後円部にトレンチを設定した。保存目的のため、調査は全て人工にて実施し、状況把握のための最低限度の掘削とした。

以下今回の調査で把握した事項を述べる

墳頂部から中部にかけてはほぼ表土下で墳丘構築土を確認した。墳丘の盛り土部分はローム層の土と黒色 土を互い違いで層を成す状況が確認された。

墳丘裾部はローム層部分まで掘り込んでいる状況が確認された。古墳に伴う周溝とも考えられるが、後述の中近世の配石遺構が上面に存在し、周溝外側の立ち上がり想定部分の調査が実施できなかった。ただ、確認された掘り込み幅が5mあり、また掘り込み底部が外側にゆるやかに傾斜し、水平にならない状況もあり、周溝を持たない古墳の可能性も考えられた。

墳頂部より明治期の調査痕と思われる遺構を確認した。主体部については今後明治期の調査痕を確認した 時に判明するのではと考えられるが、今回は明治期の調査痕の位置の確認にとどめた。

墳頂部より奈良平安期と思われる土坑を確認した。過去の調査事例から経塚関連とも考えられた。

墳丘中頃に近世の溝状遺構を確認。宝永スコリアが自然堆積し、その直下から溝内に配石している状況が みられた。

墳丘裾部に中近世ごろと思われる配石遺構確認。手鏡らしき遺物も出土し、安楽寺境内ということもあり、 寺院関連の遺構とも考えられる。

古墳の時期についてだが、遺物ちすては墳丘や裾の掘り込み部分から、陶磁器、土師器、須恵器、弥生土器、また縄文土器も確認された。今回は古墳構築土についてはほとんど掘削していないので、遺構に伴う遺物がどれかを選別するのは難しく、また土器も小片が多く時期を確定させるには資料が少ないのが現状である。ただ、土師器の傾向を見ると、5世紀ごろのものより以前の土器と思われるものが多い感じがする。

裾部掘り込み部分のスコリアを観察すると、町内の弥生時代後期の方形周溝墓や環濠の覆土最上層で確認 されるのと同じような大粒の黒色スコリアを含む層と同じような層が掘り込み最下層で確認されている。

これらの結果から推測すると、古墳の時期については5世紀より古い構築、4世紀ごろのものになる可能性があると思われるが、まだ資料が少なくさらなる資料の積み上げが必要であろう。

以上、当初の調査目的はほぼ達成したと思われる。墳丘裾の掘り込み部分が周溝となるか、また古墳の時期については、今後の調査によって判明させたいと思う。